7　日本における早発癡呆
——精神分裂病概念の受容

岡田靖雄

早発癡呆（dementia praecox）の概念がクレペリンにより提唱されるまでの精神疾患分類は症候論的なものが主であって、学者によりまちまちであった。一八五〇年にモレルが早発癡呆の語をもちいた。一八七一年にヘケル（Hecker）はカールバウム（Kahlbaum）の指導下に破瓜病を記載、一八七四年にカールバウムが緊張病を記載した。一八九九年にクレペリンは破瓜病、緊張病、妄想癡呆をまとめて早発癡呆とし、経過のよい躁うつ病とならべて内因精神病とした。一九〇八年にブロイレルは、早発癡呆が早発で癡呆におちいるとはかぎらぬとして、心理機制からSchizophrenieの概念を提起した。現在の精神疾患分類体系は、クレペリンの体系をブロイレルの修正にしたがって使用している。

クレペリン体系導入前の日本の状況は、谷川恵一が森鷗外における表現をめぐって、「病いのありか——『舞姫』における『ブリョートジン』と『パラノイア』」（一九九二年）でえがきだしている。なお、ヘベフレニー（破瓜病）の語が日本ではじめてでたのは、ジョゼフ・W・ホー、大西直三郎訳『色情衛生論』（一八九七年）中の「手淫ハ癲狂ノ合併症ニコソアレ又恐ラクハ幼心症（ヘベフレニヤ）ノ結果ニコソアレ決シテ其原因トハ認ムベカラズ」においてであろう。

呉秀三は、一八九九年にウィーンからハイデルベルクにうつってクレペリンについた。呉帰国の翌一九〇二年に発足した日本神経学会で呉は「緊張狂ニ就テ」の発表をし、またその年から巣鴨病院での病名もクレペリン体系によるものとなって早発癡狂がでている。一九〇四年かれは「精神病ノ名義ニ就キテ」で病名から「狂」の字をのぞくことを提案し、早発癡狂も早発（性）癡呆となる。教科書では呉門下の石田昇の『新撰精神病學』（一九〇六年）がクレペリン体系によっていた。荒木蒼太郎は心理機能により疾患をわけるZiehenの分類をまもりながら、判断狂の一つに早発欠損症をいれていた。合州国に留学

した松原三郎は、早発癡呆に治癒するものもあり、クレペリンの早発癡呆はひろすぎる、とクレペリン体系の修正を提唱していた。

Schizophrenie の名は呉が一九一三年に、その内容は同年に三宅鑛一が紹介した。訳語としては一九二〇年に杉田直樹が Southard の schizophrenosis を「精神内界失調疾患」と schizophasia を「言語分裂症」と訳し、一九二二年に Schizophrenie を「精神分裂症」と訳した。一九二四年に石川貞吉は「乖離性」の語をもちいた。一九二七年に今村新吉が「精神分離症」の訳語をもちい、一九三二年に小谷庄四郎は「精神乖離症」の訳をもちい翌年から杉田もそれについだ。こののち訳語としては「精神分離症」（主として京都帝国大学、北海道帝国大学）、「精神乖離症」（主として名古屋医科大学、京都府立医科大学）が共存していた。東京帝国大学ではいずれとも一定せず、松沢病院では早発癡呆がなおおくつかわれた。そのまえ一九三二年の日本神経学会総会で久保喜代二が「早発性癡呆ナル概念ガ精神分離症ナル概念ニヨリ取扱ル、ヤウニナツタ」と指摘している。一九三三年に内村祐之は「精神病学用語ノ邦訳ニ就イテ」で訳語統一の要をといた。

日本神経学会が日本精神神経学会と改称した一九三六年の総会で、久保の提唱により用語統一委員会（林道倫、齋藤玉男、内村祐之、勝沼精藏、のち荒木直躬、大熊泰治がくわわる）がもうけられ、一九三八年に、「精神病学統一用語用語第一版」ができた。ここでは「精神分裂病」の訳語がとられ、早発癡呆の語の上位におかれた。総会発表をみると、一九三八年から多くが「精神分裂病」（一部分は「精神分裂症」）をもちいていた。一九四一年から早発癡呆は姿をけした（分裂病の中核型という意味でつかわれることはある）。

現在では、「分裂病」の名称があまりに通俗化したために、その改称をもとめる動きもでている。

（精神科医療史研究会）